Y03a　文理分け教育再考　－ 高校生・大学生へのアンケート調査結果を中心に－

元村有希子、永山悦子、西川拓（毎日新聞）、○縣秀彦 (国立天文台)

高校の文理分け教育は、大学入試対策として進学校に導入されてきた。さらに現在は単純な文系・理系ではなくさらに細分化したコース選択制が進みつつある。このような文理分け教育による、特定科目偏重の教育課程は健全な社会人育成を阻害していないだろうか。例えば、日本人成人の極端な「科学離れ」の一要因とも考えられる。そこで、高校新入生 (15 高校 1514 名) と大学生 (9 大学 614 名）を対象に文理分け教育に関してアンケート調査を実施した。　高校時代に進路変更を考えた大学生は全体の２割で、そのうちの７割は転向を断念していることが分かった。「高校で文理分けをするべきではない」と考える大学生は 25 %であった。あまり早く分けないことや、転向をかなえられる柔軟なカリキュラムが必要である。その一方で、高１の５割、大学生の５割が文理分けを肯定している。理由は選択肢の中で「自分の好きな分野を早くきわめたい」が多い。こうした希望に応えられる、ある程度の選択の幅は必要だが、教養や生きる力をはぐくむためには、全教科をまんべんなく学ぶ必要もある。　生徒・学生が高校時代に「学びたい科目」として英語、生物、数学が支持されており高校生の実学指向が現れている。「入試がなかったら勉強したかった」科目で地学は決して低くないのに実際にはあまり高校で教えられていない。興味深いのは、大学生の文系進学が、国語や社会よりも「物理、数学、化学」の苦手意識に強く影響されている点で、文系学生にとってこれらの教科がもっと魅力的で、学ぶ意味の見える内容になることが科学文化形成の上で必須であろう。　講演では、アンケート調査から浮かび上がった文理分け教育の実態と改善の方策についての提案、および小学校から高校までを見通して学ぶべき内容とは何かについて考察する予定である。また、アンケートにご協力頂いた皆様の名前や学校名をここでは表記しないが、感謝の意を示したい。